

# 令和5年度教育事業「子ども地球探検隊(チャレンジ編)」報告書

1 趣 旨 花山青少年自然の家と栗駒山麓ジオパークの豊かな自然のもと、仲間と一緒に困難なことに挑戦したり、試行錯誤し活動を工夫したりすることを通して、自己肯定感や達成意欲、コミュニケーション能力、自然認識力の向上を図る。

2 主 催 独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家  
栗駒山麓ジオパーク推進協議会

3 協 力 湯沢市ジオパーク推進協議会

4 後 援 宮城県教育委員会 栗原市教育委員会

## 5 事業の概要

(1) 期 日 令和5年8月8日(火)～13日(日) 【5泊6日】

(2) 参加者

① 参加対象 小学校5年生から中学校2年生

② 参加状況 参加者数12名 (応募者数37名)

6 場 所 国立花山青少年自然の家、栗駒山麓ジオパーク

## 7 企画・運営のポイント

- ① 「自分を超越る夏」をテーマに、長期間親元を離れて、初めて会う仲間やスタッフと共に、泊まりがけの登山やテント泊をするなど、チャレンジ要素のある活動を中心にプログラムを組んだ5泊6日の長期チャレンジキャンプとする。
- ② 花山青少年自然の家や自然の家の位置している栗駒山麓の身近なフィールドを活用し、野外での活動を中心に実施する。自然認識力や感受性を育むために、五感を働かせ、気象や地形、水や火などの特性を自身の直接体験を通して理解することができるような活動を設定する。
- ③ 登山2回、テント設営2回、野外炊事5回など、主要な活動を複数回行うことで、試行錯誤したり、経験を活かして工夫したりする機会を保障する。回を重ねるごとに技能が向上することで、自身の成長を実感させ、自己肯定感を育むとともに、達成感をもたせることで、次の活動への意欲を高める。
- ④ 少人数で編成した班での活動を中心にするすることで、自分の役割を意識させ、仲間とのコミュニケーションと関係の深まりをねらう。また、一日の始まりと終わりに班で話し合う時間を設定し、自分のチャレンジの意識化を図ったり、仲間の良さや頑張りを認めたりすることで、応援し合う雰囲気作りをする。
- ⑤ 振り返りシートを活用し、一日の終わりに「自分サイコー」(自己肯定感)、「やる気モリモリ」(達成意欲)、「仲間イイネ」(コミュニケーション能力)の3つの項目で振り返る時間を設け、文章で自分自身や仲間に対して感じた思いを記録させる。最終日には、シートをもとにそれぞれのチャレンジを振り返り、キャンプで得た経験や学びを日々の生活や将来へ活かすことができるようにするための話し合いを行う。尚、シートはスタッフ間で共有し、参加者の心境の見取りをし、適切な支援に活かす。

8 実行委員 元宮城県高体連登山専門部副委員長・元宮城県松島自然の家所長 狩野 秀之 氏  
くりこま高原自然学校校長 塚原 俊也 氏

## 9 日程

	4:00	5:00	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	
8/8(火)					9:30 集合・受付 10:00 開始	受付	つどい	アイスブレイク	昼食(食堂)	御駒山ハイキング	テント設置	夕食(野外炊事)	グループワーク	入浴	振り返り	就寝				テント泊
8/9(水)	起床	支度	朝食(野外炊事)	テント撤収	登山計画 バックキング	昼食(食堂)	移動	須川野営場 テント設置	休憩	夕食(野外炊事)	入浴(温泉)	振り返り	就寝							テント泊
8/10(木)	起床	支度	朝食(野外炊事)	須川野営場 テント撤収	班会議	栗駒山登山<須川~箕森避難小屋> (パン弁当)				休憩	夕食(自炊)	荷物整理	振り返り	班会議	就寝					小屋泊
8/11(金)	起床	日の出観察 (希望者)	起床	朝食(自炊)	班会議	栗駒山登山<箕森避難小屋~東栗駒コース~いわかがみ平> (行動食)				移動	荷物整理・洗濯	夕食(食堂)	入浴	振り返り	キャンプファイヤー練習	就寝				本館泊
8/12(土)	起床	支度	班会議	朝食(食堂)	沢活動(沢④~⑪) ※沢⑦で昼食(注文弁当)						夕食(野外炊事・BBQ)	キャンプファイヤー	入浴	振り返り	就寝					本館泊
8/13(日)	起床	支度	班会議	朝食(食堂)	片付け・清掃	イワナつかみどり(塩焼き・おにぎり弁)			振り返り	つどい	解散	15:30解散								

※8/10(木)は、天候不良のため登山・山小屋泊中止。8/11(金)に日帰りで登山実施。

## 10 活動の内容について



御駒山登山



テント設置



野外炊事



グループワーク



登山計画



班の旗作成



栗駒山登山



沢活動



ボンファイヤー



イワナを捌く



1日の振り返り(班ごと)



6日間の振り返り(全員)

## 11 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足：91.7% やや満足：8.3% やや不満：0.0% 不満：0.0%

### (2) 参加者の声(事業最終日のワークシートより)

- ・この6日間を通していくつものチャレンジに挑戦して、やりとげました。この12人といっしょじゃないと出来なかった事もたくさんあったし、12人が協力したおかげでチャレンジを達成できた事も数えきれないくらいあります。この経験をした事を生かして、次につなげられたらいいと思います。
- ・仲間のいる大切さを学びました。いつもは一人でやっていたけど、6日間で友達や仲間と協力し、つらいことがたくさんあっても12人がいたから楽しかったです。(中略)これからきっといろんな人たちに会うと思います。人それぞれの個性や良いところなどを見つけて楽しくすごしたいです。

### (3) 成果

- ・参加者は、コロナ禍に小学校中・高学年を過ぎており、仲間との密な関わり合いや直接体験をする機会が少なかったと思われる。また、登山、テント泊、野外炊事などが未経験の参加者もあり、野外活動や自然体験活動を軸とした本事業は、参加者に貴重な体験を提供する場となったと考える。
- ・初日の夜に、「なぜ参加しようと思ったか」、「どんなことにチャレンジしたいか」について、全員が話し、聴き合う時間を設けた。また、毎日、一日の始まりと終わりに自分の思いを話したり書いたりして言葉にし、仲間に聴いてもらう時間を設けた。お互いの思いを知り、応援し合う雰囲気が出たことで、安心感が得られたとともに、仲間への思いやりとチャレンジへの意欲が高まったと考える。
- ・自己肯定感や達成意欲が日を追うごとに向上していったのに対し、仲間に対しては初日から好意的な感情をもつ参加者が多かった。一班を4名の少人数で編成し、アイスブレイクを行った後、協力しなげなければならない活動を多く設定したため、交流や助け合いが自然と生まれる環境であったと考える。
- ・日程にゆとりがあったため、試行錯誤する機会を保障（登山2回、テント設営・撤収各2回、野外炊事5回）することができた。初回の経験を活かして、2回目の登山ではペース配分を工夫し、2回目のテント設営・撤収は手際良く全て自分たちだけで行っていた。また、野外炊事においては、薪割りや火起こし、調理等、回を重ねるごとに目に見えて上達していった。1回だけでは、単なる体験で終わってしまう。複数回行うことで、自然への認識を確かなものにし、失敗が経験として生き、成功体験につながったことで、自己肯定感の向上につながったと考える。
- ・一般的に、登山の教育的価値は、辛さを乗り越える（忍耐力）ことで得る「達成感」に収束してしまう傾向がある。今回は、登山をメインプログラムに設定するにあたり、班ごとに登山計画（コースの選定、休憩のとり方、ペース配分、荷物の分担等）を立て、実際の登山では参加者が先頭を歩き、スタッフは後方から見守ることにした。参加者は、知性と感性を働かせ、お互いを思いやりながら主体的に登山をすることができ、ハードな行程であったにも関わらず、「またみんなで登りたい」といった前向きな発言が多くみられたことから、参加者の自己肯定感や仲間意識の向上につながったと考える。
- ・ほとんどの参加者が、最終日に困難なことへのチャレンジを振り返る際、達成できた要因に仲間の励ましや協力、助け合い、勇気をあげた。仲間と心を通わせ、他者を助けたり助けられたりしながらチャレンジすることが、達成意欲や自己肯定感の向上に良い影響を及ぼすのではないかと考える。

### (4) 課題

- ・参加者の実態が分からず、スケジュールや安全管理体制など、最適な計画であるか判断が難しく、不十分な点があった。顔合わせやプレ合宿を行うなどして、事前に参加者の体力や参加動機などを把握し、計画の修正を行うことができれば、よりねらいにせまる事業にすることができると考える。
- ・何をもってチャレンジとするか、どの程度の負荷が適切かなど、コンセプトそのものに対して担当間の認識にズレがあった。もっと実行委員の先生方から野外教育についての専門的な指導・助言を得ながら、担当者で話し合いを重ね、ねらいと活動を設定することができれば、より参加者の成長にとって効果的なプログラムと適切な体制を組むことができると考える。ひいては、担当者自身のスキルアップにもつながると考える。
- ・参加者の変容について、前出の振り返りの傾向で捉えようと試みた。同じ数値であっても、参加者によっても、日によっても質的にはまったく違うものであるだろう。自己評価の数値には表れない成長や変化、葛藤をどのように見取り、個人や全体にフィードバックしていくか検討の余地がある。
- ・担当者間での役割分担が不明確で、物品の準備や当日の動きが場当たりのようになった。担当の人数が多いと、情報共有や合意形成が難しく、機動力に欠ける場面もあることから、担当の人数を絞り、必要に応じたスポットでの対応が望ましい。
- ・事業計画に充てる期間が十分ではなかった。長期キャンプを新規事業として実施する際は、場所の選定、ねらいと活動の吟味、実地踏査などのリサーチや物品準備、担当者間の擦り合わせ、関係者とのゆとりをもった日程調整のため、事業実施の半年～1年前には、計画を立て始める必要がある。

担当：企画指導専門職 菊池 恵理